

佐佐木由幾の命日・二月二日。家族といっしょに谷中の墓地に墓参りに行つたところ、花を持つて墓参りに来

て下さつた宇都宮とよさんをはじめ十余人の方々と偶然行きあつた。その折のことを、ドキュメント・タッチでたんたんと表現した一首。「日照り雨過ぎる」と現在形にして成功。

風ひくく吹き過ぐるたび蠟梅のこわばる枝はみじか

く震う

松橋雅実

「ひくく吹く」「こわばる枝」「短く震う」という特色

ある似通つたフレーズをあつめて、独特な雰囲気をかもしだしている。まだ寒い時期、寒風にふるえる蠟梅の存在感を表現している。

新鮮な野菜を見分けるかのごとく君に差し出す言葉

伊藤実希子

言葉を題材にしつつ、八百屋やスーパーで野菜を選ぶ

という比喩の意外性に注目。

ハレーションを起こしたような部屋にいて着地点な

森屋めぐみ

「着地点なき会話」を「聞く」ではなく「見る」とし

たことで、話の輪の外側にいることが分かる。うまい。

ただ、会議なのか、友人が数人集まつての会話なのか、会話の種類によって空気感がちがい、部屋の光の具合もちがつてくるような気がする。読者が読み込むためのヒントがほしい。

何千の男のこうべに触れにしか 女装どわかる「女

理髪師」

石田郁男

「女装とわかる「女理髪師」」が、なにかこう妖しい感じで、その怪しさが一首の核になつてゐる。リヨン在住の作者、女装した理髪師はもちろんフランス人なのだろう。カッコは不要と思う。

屋根の上ピビンピビンと猫の尾をつり上げている鰯

雲かな

蒼井杏

メルヘンっぽいイメージを楽しみたい一首。「ピビンピビン」がしつぽの長さを暗示している。猫のしつぽが上空の鰯雲と連動しているという。スケールが大きい上に、華やかさもあつて、なかなか。

斑鳩の風に乗りゆく鐘の音を追ひてわが踏む砂利も鳴るなり

金有美

法隆寺の歌一連中の一首。視覚ではなく聴覚だけの旅の歌はめずらしい。また、ふつうは「風に乗りくる」だろう。鐘の音が背後で鳴つてゐるのも珍しい。そんな仕組みのせいだろう、不思議を読んだ、読後にそんな感じが残る一首。

水音してまた静かなる展示室 青花魚藻文酒会壺置

経塚朋子

「青花魚藻文酒会壺」

は、東京富士美術館の中国陶磁名品展に出品された壺で、花や魚や藻が描かれた青い壺である。上句の水音は、壺の図柄からの連想だろう。下句は、長い名前の音としての面白さをうまく生かしている。名前への興味を核にした作。